

高齢者看護実習前後の看護学生の高齢者に対する イメージの変化（第1報）

切 明 美 保 子¹・久 保 宣 子¹
小 笠 原 み や 子²

I. はじめに

高齢者看護で大切なことは、高齢者の尊厳を守り、高齢者の生活を理解し、その生活の延長上で生活できるように支援することである。高齢者ケアの基本姿勢や看護の質には、看護者の持つ高齢者イメージが関連しているといわれている¹⁾。しかし、超高齢社会への突入、核家族化の進行等により、高齢者との接触が少ない学生が増加している。このような学生が高齢者に対するイメージをよりよく形成していくことは難しい。

看護学生の高齢者に対するイメージに関する先行研究では、高齢者のイメージの形成には学生の生活背景が影響すること、特に高齢者との同居経験については、同居しているだけでなく高齢者と話すなどの接する機会の程度や²⁾、実習体験が大きく影響している^{3,4)}。また、講義・演習・実習の一連の学習過程の中で、否定的イメージから肯定的イメージに変化している^{5,6)}が、一方では、実習後に肯定的イメージが低下したという報告もある^{7,8)}。

社会の高齢化に伴い、臨地実習でも学生が関わる対象は高齢者が多くなっている。学生が高齢者にどのようなイメージをもって関わっていくかにより、援助内容にも影響を与えると考える。

そこで看護学生が、高齢者に対してどのようなイメージを持っているのか、また、高齢者看護実習を通してどのように高齢者イメージが変化したかを明らかにすることを目的とした。

II. 研究方法

1. 研究対象

A 短期大学看護学科2年生で、2014年度に高齢者看護実習を実施した83名を対象とする。

2. 調査方法

自記式質問紙調査である。対象者に調査の趣旨、個人情報保護など倫理的配慮について文書及び口頭で説明した後、質問紙に記入してもらいその場で回収する。回答をもって同意したと判断する。

3. 時期 2014年11月～2014年12月

調査は①実習オリエンテーション開始前
②実習2週間後 ③実習終了時の計3回調査する。

4. 調査内容

1) 対象者の属性

年齢、性別、祖父母や高齢者との同居の有無、祖父母に対する思い、祖父母や高齢者との日常的なかわりの機会の頻度、基礎看護実習での高齢者患者の受け持ちの有無、実習以外での高齢者の介護経験の有無とした。

¹ 八戸学院大学健康医療学部看護学科

² 八戸看護専門学校

2) 高齢者に対するイメージ

SD法を用いた大塚ら⁹⁾や安田ら¹⁰⁾が用いている15項目の尺度を使用する。イメージ尺度の得点化は、「尊敬できる」等の肯定的表現を評点6に、「尊敬できない」等の否定的表現を評点1との6段階とし、得点が高いほど肯定的イメージとした。

3) 高齢者看護に対する関心と看護実習で

高齢者とのかかわりで印象に残ったこと
高齢者看護に対する関心についてはVASで表現できるようにした。また、臨地実習で高齢者とのかかわりで印象に残ったことについて自由記載欄を設けた。

5. 分析方法

分析は3回の調査すべてに回答が得られた59名(71.1%)を対象とした。

祖父母や高齢者との同居の有無、祖父母に対する思い、祖父母や高齢者との日常的なかかわりの機会の頻度、基礎看護実習での高齢者の受け持ちの有無、実習以外での高齢者の介護経験の有無については単純集計した。高齢者看護への関心度、実習前後の高齢者に対するイメージの変化、実習2週間後の高齢者看護実習IとIIの実習内容の違いによる高齢者に対するイメージの差についてはWilcoxon符号付順位検定を行った。有意水準は5%とした。実習での高齢者とのかかわりで印象に残ったことについての記述内容については、内容が類似しているものをカテゴリー化した。

6. 研究上の倫理的配慮

研究対象者に対して研究の意義、目的、方法を文書により説明した。研究への参加は自由で、質問紙への記載内容の有無や提出の有無が成績に影響しないこと、拒否や途中で中止することが可能であること、高齢者に対するイメージの変化を把握する為に調査ごとに質問紙をマッチングさせる必要があるため質問紙に氏名を記載してほしいこと、同意できない場合は、白紙で

提出してかまわないこと、データは厳重に管理し調査内容は研究目的以外に使用せず、結果を公表する場合には個人が特定される記載をしないこと、また、データ入力・処理については成績提出後に行うことを口頭と文書で説明した。

研究遂行にあたっては、八戸学院大学・八戸学院短期大学部研究倫理委員会の承認を得た。

7. A 短期大学の高齢者看護学に関するカリキュラム

1) 講義演習

1年次後期に「高齢者看護概論」1単位30時間、2年次前期に「高齢者看護援助論」2単位60時間の講義・演習を行っている。高齢者を具体的にイメージできるようにDVDの視聴や高齢者疑似体験や食事の援助などの演習を行っている。

2) 臨地実習

1年次に基礎看護実習I・IIを行った後、2年次後期に高齢者看護実習Iと高齢者看護実習IIを行っている。3年次に高齢者看護実習以外の専門実習を行っている。

高齢者看護実習Iは、2単位90時間、2週間で老人保健施設又は老人福祉施設で行っている。高齢者看護実習IIは、2単位90時間で2週間、病院で実習している。クラスを2グループに分け、片方のグループが高齢者看護実習Iの後に高齢者看護実習IIを実施し、残りのグループは高齢者看護実習IIの後に高齢者看護実習Iを行い、4週間で高齢者看護実習I・IIを終了している。

III. 調査結果

1. 対象者の属性

対象者59人は、男性3人(5.0%)、女性56人(94.9%)、平均年齢20.5(SD2.9)歳であった。祖父母や高齢者との同居経験については、「現在同居している」が20人(33.9%)、「以前同居していた」が16人(27.1%)、「同居経験が

ない」は23人（39.0%）であった。祖父母に対する思いについては、「好き」が41人（69.5%）、「どちらともいえない」が17人（28.8%）、「嫌い」が1人（1.7%）であった。祖父母や高齢者との日常的なかかわりの機会については、「よくある」が25人（42.4%）、「時々ある」が29人（49.1%）、「かかわりがない」が5人（8.5%）であった。実習以外での高齢者の介護経験については、「あり」が25人（42.4%）で、「なし」が34人（57.6%）であった。1年次の基礎看護実習での高齢患者の受け持ち経験については、「あり」が53人（89.8%）、「なし」が6人（10.2%）であった。

2. 高齢者看護実習前後の高齢者に対するイメージの変化（表1）

実習前の高齢者に対するイメージ15項目全体の平均値は4.2で、15項目のうち14項目が中間値3を上回っていた。平均値が高かった項目は、「尊敬できる—尊敬できない」・「暖かい—冷たい」がともに4.9、次いで「優しい—厳しい」4.8と続き、逆に平均値が低かった項目は、「強い—弱い」3.6、「素直—頑固」3.4、「考えが新しい—考えが古い」2.8点であった。

4週間の実習後の高齢者に対するイメージ項目全体の平均値は4.2であった。平均値が高かった項目は「尊敬できる—尊敬できない」・「暖かい—冷たい」・「優しい—厳しい」・「プライドが高い—プライドが低い」がともに4.7であっ

表1 実習前後の高齢者に対するイメージの変化

(n=59)

高齢者イメージ項目	実習前		実習終了後		有意確率
	平均値	SD	平均値	SD	
尊敬できる—尊敬できない	4.9	0.8	4.7	0.9	
役に立つ—役に立たない	4.5	1.0	4.3	0.9	
好き—嫌い	4.7	1.0	4.6	0.9	
明るい—暗い	4.3	0.7	4.2	0.8	
積極的—消極的	4.0	0.9	3.8	0.9	
さっそうとしている—みじめ	3.9	0.8	3.9	0.9	
強い—弱い	3.6	1.0	3.9	1.1	
暖かい—冷たい	4.9	0.9	4.7	0.9	
やさしい—厳しい	4.8	1.0	4.7	0.9	
上品—下品	4.0	0.9	4.2	1.0	
思いやりがある—思いやりがない	4.7	1.0	4.6	0.9	
プライドが高い—プライドが低い	4.5	0.9	4.7	1.0	
きれい—きたない	3.8	0.8	3.7	0.8	
素直—頑固	3.4	1.2	3.8	1.2	**
考えが新しい—考えが古い	2.8	1.1	2.7	1.0	

Wilcoxon 符号付順位検定

*: $p < 0.05$

** : $p < 0.01$

た。得点が低かったのは、「積極的—消極的」3.8, 「きれい—きたない」3.7, 「考えが新しい—考えが古い」2.7であった。

実習前後の高齢者に対するイメージの平均値を比較すると、「プライドが高い—プライドが低い」(4.5 → 4.7), 「上品—下品」(4.0 → 4.2), 「素直—頑固」(3.4 → 3.8)の3項目が実習前よりも高くなっており, 「素直—頑固」($P < 0.01$)の1項目で有意差が見られた。しかし, その他の12項目では平均値が低下していた。

3. 高齢者看護実習Ⅰ・Ⅱの順序性による高齢者に対するイメージの変化(表2)

実習2週間後は, 対象者59人のうち23人(39.0%)が高齢者看護実習Ⅰ(施設実習)を終了し, 36人(61.0%)が高齢者看護実習Ⅱ(病院実習)を終了した直後の調査であった。

1) 高齢者看護実習Ⅰから実施した群の高齢者に対するイメージ

高齢者看護実習Ⅰから実習した群の実習前の高齢者に対するイメージの平均値は4.1であった。平均値が3以上の項目は15項目中14項目で, 3未満は「考えが新しい—考えが古い」の1項目だけであった。2週間後では, 高齢者に対するイメージ全体の平均値は4.2で, すべての項目で平均値が3以上となった。実習終了後では項目全体の平均値が3.9で, 実習前と比較すると「上品—下品」(3.8 → 3.9)「素直—頑固」(3.3 → 3.5)の2項目で上昇していたが, 「強い—弱い」(3.8 → 3.8), 「プライドが高い—プライドが低い」(4.4 → 4.4)の2項目は変化がなかった。残りの11項目は平均値が低下しており, 「尊敬できる—尊敬できない」($p < 0.05$), 「役に立つ—役に立たない」($p < 0.05$), 「暖かい—冷たい」($p < 0.01$)の3項目で有意差がみられた。

2) 高齢者看護実習Ⅱから実習した群の高齢者に対するイメージ

高齢者看護実習Ⅱから実習した群の実習前の高齢者に対するイメージの平均値は4.2であった。平均値が3以上の項目は15項目中14

項目で, 3未満は「考えが新しい—考えが古い」(2.7)の1項目であった。2週間後では, 全体の平均値は4.4で, 「考えが新しい—考えが古い」(2.7)以外の14項目が平均値3以上であった。

2週間後と実習前の平均値と比較すると11項目で上昇しており, 「上品—下品」「思いやりがある—思いやりがない」「素直—頑固」の3項目で有意差がみられた($p < 0.05$)。また, 「役に立つ—役に立たない」(4.6 → 4.4)の1項目が下降していた。

実習終了後は項目全体の平均値が4.4で, 実習前と終了後の平均値を比較すると10項目で上昇していて, 「強い—弱い」「素直—頑固」の2項目で有意差がみられた($p < 0.05$)。また, 「役に立つ—役に立たない」(4.6 → 4.5)「積極的—消極的」(4.0 → 3.8)「きれい—きたない」(4.0 → 3.9)の3項目で平均値が下降していた。

4. 看護実習で高齢者とのかかわりで印象に残ったこと(表3)

実習前の調査では, 基礎看護実習で高齢者とのかかわりで印象に残ったことの記載は, 全部で54個あり17のカテゴリーに分類された。〈話が弾み実習できて楽しかった・分かり合えた〉が12個で一番多く, 〈孫のように接してくれてうれしかった〉〈昔のことをよく話してくれた・教えてくれた〉がともに5個, 〈お礼を言われうれしかった, 励ましてくれた〉〈優しくあったかい〉〈病気に対してマイナス思考〉がそれぞれ4個と続いていた。〈知識や経験が豊富〉が3個, 〈自分のことを自分でしたいと頑張っていた〉〈ケアが大変だった〉〈ケアを振り返り反省した〉が各2個, 〈回復のため頑張っていた〉〈回復を実感しうれしかった〉〈自分の意見を持っている〉〈危険がいっぱい〉〈寂しがっていた〉〈思うように動けない人が動けない人が多い〉が各1個であった。

2週間後の調査では, 24個の記載があり,

表2 高齢者看護実習Ⅰ・Ⅱの順序性による高齢者に対するイメージの変化

高齢者のイメージ項目	調査時期	高齢者看護実習Ⅰから 実習した群 (n=26)		高齢者看護実習Ⅱから 実習した群 (n=33)	
		平均値	有意確率	平均値	有意確率
尊敬できる—尊敬できない	実習前	4.8] *	5.0	
	2週間後	4.7		5.0	
	実習後	4.3		5.0	
役に立つ—役に立たない	実習前	4.5] *	4.6	
	2週間後	4.3		4.4	
	実習後	4.0		4.5	
好き—嫌い	実習前	4.6		4.7	
	2週間後	4.7		5.0	
	実習後	4.3		4.8	
明るい—暗い	実習前	4.2		4.3	
	2週間後	4.2		4.5	
	実習後	4.0		4.4	
積極的—消極的	実習前	4.1		4.0	
	2週間後	4.0		4.2	
	実習後	3.8		3.8	
さっそうとしている—みじめ	実習前	4.0		3.8	
	2週間後	3.9		4.0	
	実習後	3.7		4.0	
強い—弱い	実習前	3.8		3.4] *
	2週間後	3.9		3.7	
	実習後	3.8		3.9	
暖かい—冷たい	実習前	4.8] **	4.9	
	2週間後	4.7		5.0	
	実習後	4.3		5.0	
優しい—厳しい	実習前	4.7		4.9	
	2週間後	4.6		5.1	
	実習後	4.2		5.0	
上品—下品	実習前	3.8		4.2] *
	2週間後	4.0		4.6	
	実習後	3.9		4.5	
思いやりがある—思いやりがない	実習前	4.6		4.7] *
	2週間後	4.4		5.1	
	実習後	4.2		4.9	
プライドが高い—プライドが低い	実習前	4.4		4.5	
	2週間後	4.5		4.5	
	実習後	4.4		4.8	
きれい—きたない	実習前	3.6		4.0	
	2週間後	3.7		4.1	
	実習後	3.5		3.9	
素直—頑固	実習前	3.3		3.4] *] *
	2週間後	3.8		3.9	
	実習後	3.5		4.0	
考えが新しい—考えが古い	実習前	2.8		2.7	
	2週間後	3.0		2.7	
	実習後	2.7		2.7	
(総平均)	実習前	(4.1)		(4.2)	
	2週間後	(4.2)		(4.4)	
	実習後	(3.9)		(4.4)	

wilcoxon 符号付順位検定 * : $p < 0.05$
** : $p < 0.01$

表3 実習で印象に残ったことについての記載内容

カテゴリー	実習前 (基礎実習)	実習 2週間後	実習 終了後
話が弾み実習できて楽しかった・分かり合えた	12	5	1
孫のように接してくれてうれしかった	5	1	
昔のことをよく話してくれた・教えてくれた	5	2	1
コミュニケーションに困った	5	1	
お礼を言われうれしかった, 励ましてくれた	4	6	
優しくあったかい	4	2	
病気に対してマイナス思考	4		1
知識や経験が豊富	3		
自分のことを自分でしたいと頑張っていた	2	1	
ケアが大変だった	2		
ケアを振り返り反省した	2	1	
回復のために頑張っていた	1		
回復を実感しうれしかった	1	2	
自分の意見を持っている	1		
危険がいっぱい	1		
寂しがっていた	1		
思うように動けない人が多い	1		
社会面が大切			1
相手を尊重してかかわることが大切		3	
合計	54	24	3

〈お礼を言われ嬉しかった, 励ましてくれた〉が6個, 〈話が弾み実習できて楽しかった・分かり合えた〉が5個, 〈相手を尊重して関わるのが大切〉が3個, 〈昔のことをよく話してくれた・教えてくれた〉〈優しくあったかい〉〈回復を実感しうれしかった〉がともに2個, 〈孫のように接してくれてうれしかった〉〈自分のことを自分でしたいと頑張っていた〉〈コミュニケーションに困った〉〈ケアを振り返り反省した〉が各1個であった。

実習終了後の調査では, 4個の記載があり, 〈話が弾みうれしかった・分かり合えた〉〈昔のことをよく話してくれた・教えてくれた〉が

2個, 〈病気に対してマイナス思考〉〈社会面が大切〉が各1個記載されていた。

5. 高齢者看護への関心の変化

高齢者看護実習への関心については, 実習前は平均6.5 (SD2.2)であったが, 実習2週間後には6.9 (SD1.8), 実習後は6.8 (SD1.9)であった。Wilcoxon符号付順位検定を行った結果, 有意差は見られなかった。

IV. 考 察

1. 高齢者看護実習前的高齢者に対するイメージ

今回の調査では、学生が実習前に持っている高齢者に対するイメージは、15項目中14項目で尺度の中間値3を超え4.2であり、学生は高齢者について概ね肯定的なイメージと「考えが古い」という否定的なイメージを持っていた。

学生が高齢者をイメージする場合、思い浮かべるのは身近な高齢者といわれる。今回の調査では、高齢者と現在同居している割合は33.8%であり、平成26年度の全国の三世帯世帯割合の13.2%¹¹⁾を大きく上回っており、地域性も考えられ同居率が高いと考えられる。また祖父母や高齢者との日常的なかかわりの機会についても「よくある」と「時々ある」を合わせると9割に達し、祖父母を好きと回答している人の割合も約7割と高かった。今回の調査では、対象学生の祖父母の年齢や健康状態についての調査は行っていないため詳細は分からないが、年齢的にも学生の祖父母は比較的若い高齢者であることが予測される。健康高齢者との関わりが肯定的イメージの形成につながることや¹²⁾、高齢者に対するイメージや知識・理解は、高齢者から世話を受けた経験のある学生はポジティブなイメージが強く、高齢者とのかかわり経験のある学生のほうがない学生よりもエイジズムが低い¹³⁾。また、実習前の調査で、基礎看護実習時の高齢者とのかかわりで印象に残ったこととして、〈ケアが大変だった〉〈コミュニケーションに困った〉等の困った、大変だったというネガティブな内容は少数であり、〈話が弾み実習できて楽しかった・分かり合えた〉〈お礼を言われうれしかった・励ましてくれた〉〈孫のように接してくれてうれしかった〉など、高齢者とのかかわりで受け入れられた・うれしかった等の記述内容が多く見られていた。これらのことから、実習前的高齢者に対するイメージが肯定的であったと思われる。

2. 高齢者看護実習後的高齢者に対するイメージの変化

実習前後の高齢者に対するイメージ15項目の全体の平均値は4.2→4.2で変化は見られなかったが、実習後に有意差がみられた「素直—頑固」を含めた3項目が上昇していた。しかし、実習前に否定的であった「考えが新しい—考えが古い」は2.8→2.7で、実習後も否定的なイメージのまま、肯定的なイメージであった他の10項目も平均値が低下していた。しかし、高齢者看護への関心は、実習前の6.5から実習後には6.8とやや上昇していた。

実習内容の順序性からみると、高齢者看護実習Iから実習した群では、高齢者看護実習II後にイメージは低下し、「尊敬できる」「役に立つ」「暖かい」の3項目で、実習前より否定的なイメージに変化していた。これらは、新たな視点で高齢者をとらえ直す体験は負の方向へイメージ変化をもたらす場合もある¹⁴⁾と示されており、本調査と同様の傾向であった。

高齢者看護実習Iは老人保健施設又は特別養護老人ホームでの実習であり、多くの入所者に接する実習である。学生の接する高齢者は、疾患の後遺症や障がいにより健康状態が低下し身体的に行動が制限されているだけでなく、認知症や認知機能低下を併せ持っていることも多い。看護学生は、一般高齢者よりも認知症高齢者に対して否定的なイメージを持っている¹⁴⁾ことや、大変や嫌という苦手意識がイメージの否定化につながりやすい¹⁵⁾ことや、高齢者の加齢に伴う身体機能の低下をマイナスイメージにとらえる傾向があること^{16,17)}が報告されており、この実習は、多くの高齢者に接する実習内容であり、高齢者の生活理解が表面的になりやすいことも考えられ、実習終了後のイメージ低下につながったのではないかと考える。

高齢者看護実習IIから実習した群では、平均値が4.2→4.4と上昇しており、2週間後では、「上品」「思いやりがある」「素直」で、実習終了時には「強い」「素直」の項目がより肯定的

に変化していた。高齢者看護実習Ⅱでは、一人の高齢患者を受け持ち看護展開していることから、じっくりかかわることが求められる。看護援助を提供するには、高齢者の考えや生活を理解していくことが必要であり、肯定的なイメージを持つことで、学生が高齢者に働きかけやすくなると考える。看護実習終了後の印象に残っていることとして、＜コミュニケーションが取れてうれしかった＞という反面、＜相手を尊重してかかわることが大切＞＜ケアを振り返り反省した＞という内容もあることから、高齢者の生活世界を理解しようと努力していると思われる。

看護学生の高齢者に対するイメージは老年看護学学修過程でポジティブに変化する¹⁸⁾という報告がある一方で、演習や実習で体験する高齢者の具体的イメージが否定的イメージに変化すること¹⁹⁾が報告されている。看護学生のとらえるイメージの傾向は高齢者の人柄や精神面を肯定的にとらえ、老化や活動性といった身体面は否定的にとらえている²⁰⁾ことから、高齢者看護実習Ⅱから実習している群では、高齢者と深くかかわり、治療してよくなりたい、リハビリを行って自立したいといった高齢者の闘病姿勢から高齢者に対するイメージが高くなったのではないかと考える。

今回の調査で、高齢者看護実習ⅠとⅡの実習順序における高齢者に対するイメージの特徴が明らかになった。高齢者に対するイメージをよりよく形成していくことは、高齢者ケアの基本姿勢に影響すると考える。高齢者のイメージは実際に高齢者とかわりを持つことによって大きく変化していくことを認識し、できるだけ高齢者とかわる機会を作っていくことが重要と考える。

V. 結 論

1. 高齢者看護実習は、15項目の高齢者のイメージのうち、14項目が肯定的なイメージで

あり、「考えが新しい—考えが古い」の1項目が否定的なイメージであった。

2. 高齢者看護実習Ⅰ・Ⅱ後の高齢者に対するイメージは、15項目のうち「素直—頑固」の1項目で有意差がみられ、実習前よりも肯定的に変化していた。

3. 高齢者看護実習Ⅰ後にⅡを実習した群は、イメージの平均値が4.1→4.2→3.9と変化しており、高齢者看護実習Ⅱの前後で「尊敬できる—尊敬できない」「役に立つ—役に立たない」「暖かい—冷たい」の3項目が有意に低下していた。

4. 高齢者看護実習Ⅱ後にⅠを実習した群は、イメージの平均値が4.2→4.4→4.4と上昇しており、Ⅱの後では「上品」「思いやりがある」「素直」の3項目が、実習終了時には「強い」「素直」の2項目で有意に上昇していた。

5. 高齢者イメージを肯定的に持てるように、健康な高齢者とかわりを持つ工夫が必要である。

謝 辞

本研究を行うにあたりご協力いただいた看護学生の皆様に深く感謝いたします。

引用参考文献

- 1) 大塚邦子, 正野逸子, 日浦瑞枝, 白井百合子: 看護学生の老人に関するイメージの研究 SD法によるイメージ評価と描画特徴とを中心に, 老年看護学, 4(1): 98-104, 1999.
- 2) 兎澤恵子, 古市清美, 高木タカ子: 看護大学生の連続学習による高齢者イメージ変化, 群馬バース大学紀要, No. 3: 47-53, 2006.
- 3) 笠井恭子, 吉村洋子, 寺島喜代子: 臨地実習における看護学生の高齢者イメージの変化, 福井県立大学論集, 23号: 107-116, 2004.
- 4) 渡邊裕子, 倉田トシ子, 森田祐代: 看護学生の高齢者イメージに関する研究 老年看護学講義開始前から老年看護学臨地実習Ⅱ終了

- までの変化，山梨県立看護大学短期大学部紀要，11(14)：159-166, 2006.
- 5) 安田千寿，北村隆子，畑野相子：老年看護教育プログラムが看護学生の高齢者イメージ形成過程に影響する要因（第3報）老年臨床看護論実習前後における高齢者イメージの比較，人間看護学研究，第8号：57-66, 2010.
 - 6) 穴井美恵，荻野朋子，大平政子：看護大学生の高齢者のイメージ 高齢者施設における実習前後の変化，中京学院大学看護学部紀要，2(1)：11-17, 2012.
 - 7) 須田厚子，榎本朋子：看護学生の講義・演習・実習による高齢者イメージの変化，川崎医療短期大学紀要，26：29-36, 2006.
 - 8) 畑野相子，北村隆子，安田千寿，老年看護学教育プログラムが看護学生の高齢者イメージ形成過程に影響する要因（第1報）1年次から2年次における老年看護学授業前後の比較，人間看護学研究，第8号：35-45, 2010.
 - 9) 前掲書1.
 - 10) 前掲書5.
 - 11) 内閣府：平成28年度版高齢社会白書P13.
 - 12) 樋田小百合，熊田ますみ，大瀧康平，神谷きらら，桐山美咲，斉藤かな子，曾我あゆみ：健康高齢者とのかわりによる看護学生の高齢者イメージ，岐阜医療科学大学紀要，(8)：7-15, 2014.
 - 13) 林綾乃，倉田信子，杉浦伸一：第一学年と第4学年の比較による看護学生の高齢者に対するイメージと知識・理解・コミュニケーションの特徴，日本看護医療学会雑誌，13(2)：45-55, 2011.
 - 14) 浅井さおり，沼本教子，柴田明日香：老人看護学学習過程における学生の高齢者イメージの変化の縦断的検討，日本看護学教育学会誌，16(1)：53-61, 2006.
 - 15) 木村誠子，片岡万里：看護学生の老年看護学実習前における認知症高齢者のイメージの特性 一般高齢者と認知症高齢者に対するイメージの比較，高知大学学術研究報告，55：37-43, 2007.
 - 16) 岩井恵子：看護学生の持つ高齢者イメージの分析，関西医療大学紀要，Vol. 4：110-121, 2010.
 - 17) 前掲書3.
 - 18) 前掲書1.
 - 19) 前掲書8.
 - 20) 伊藤豊美，住垣智恵子，後藤友美，岩崎たか子，林稚佳子：老年看護実習における看護学生の高齢者に対するイメージの変化，国立看護大学校研究紀要，9(1), 2010.